大阪人の心の奥にひそむ懐かしさ

夏のミナミには灯りがよろしいナ

夏になると道頓堀川の両岸に、ずらっと提灯をならべて点灯した美しい景観が出現する。「道頓堀川万灯祭」である。「大阪ミナミ地域の活性化、水辺の賑わいづくり」をテーマにミナミの商店街が連携した「いっとこミナミ実行委員会」が主催し、道頓堀川の遊歩道「とんぼりリバーウォーク」の深里橋（四ツ橋筋）から日本橋（堺筋）までの約800メートルが千数百個の提灯で飾られるのである。会期は7月1日から8月31日まで。宵闇の川面に映る提灯の明かりは幻想的で、大阪の新しい夏の風物詩として定着しつつある。

もともとミナミでは、法善寺の水掛不動にいつも提灯が吊られているし、ご当地キャラの招き猫「みにゃみん」がいる千日前の商店街も、夏には、たくさんの提灯を吊りさげる。近年のこの界隈は外国人観光客が増加し、深夜でも人通りが絶えない不夜城ぶりに、こちらが海外旅行して異国に迷い込んだ錯覚にさえ陥るが、夏のこの期間は、子どものころ、夏休みでお盆に田舎の祖父母の家に帰ったような、なんとも懐かしく、ホッとするような気分になる。

こうしたミナミの提灯の灯りを見て思い出すのが、作家・五木寛之の「こころの新書」の一冊にある『宗教都市・大阪／前衛都市・京都』〈講談社、平成17（2005）年〉である。大阪は、理想を追うよりも厳しい現実社会を肯定し、そこを生き抜くために知恵を絞って活動する商人の町として発展してきた。リアリズムの街なのであるが、五木さんによると、こうした商売を支える精神的な根底には、石山本願寺以来の人々の信仰心があったというのである。

ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904～1905年）で、プロテスタントの禁欲主義が、逆に近代資本主義の成立に影響を与えたことを論じたが、商売に対する勤勉さに信仰心がなければ、単なる弱肉強食の無軌道な利潤追求の世界に堕してしまうわけだ。

そう言われてみると、大阪が商都として発展してきた精神的背景には、日々の生活での勤勉さがあったし、全国に知られた十日戎や天神祭などの祭礼も、観光客誘致をめざしているというよりも、地元の人たちの篤い信仰心に支えられて、毎年盛大に催されているのが理解できる。

ガイドブック風にいえば「道頓堀川万灯祭」も、観光客誘致の“光と水のページェント”となるのだが、繁華街の雑踏の真ん中にあって、どこか心が洗われるようなキモチが湧くのも事実である。精神的なものを呼び起こすのだ。献灯料金から、東日本大震災や熊本地震に義援金を出しているのも、闇を照らす灯りが人間の琴線に触れるからだろう。

昭和初期の堀江での絵行燈（NPOなにわ堀江1500蔵）

昨年から私も提灯を出させていただいている。提灯に記す名は本名では気恥ずかしいので、二年前に天国に旅立った愛猫にちなむ書斎の名称にしている。それを眺めるために道頓堀に出かけることが多くなるのだが、それはそれでまたうれしい。

ところで道頓堀と灯りの話とくると、もうひとつ思い出すことがある。川柳作家で、初代中村鴈治郎の座付き作者でもあった食満南北（1880～1957）の絵行燈である。

戦前の堀江（大阪市西区）の花街は、菅楯彦、生田花朝、須磨對水、山口艸平、赤松雲嶺ら在阪画家を中心に絵行燈を街中に架ける行事が名物だった。それが一時中断したのを南北は復活させ、鴈治郎、福助、市蔵、延若ら歌舞伎俳優にも揮毫を依頼し、自らも洒脱な絵を描いた。

戦後も南北の絵行燈は有名で、昭和23（1948）年、新聞社の後援で開催された「道頓堀まつり」では、南北が描いた絵行燈が、道頓堀、千日前、法善寺、戎橋周辺など南地一帯に飾られた。

しっとりして“はんなり”した絵行燈の風情は、大阪人の心の奥底に根をはり、心の安らぎをもたらす。「道頓堀川万灯祭」がミナミの街の景色によく馴染むのもまた、古くからの芝居町として発展してきたこの街の、歴史の記憶を呼び覚ますからであるのだろう。

筆者プロフィール
橋爪 節也　はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。